

みょう ぱる
女原遺跡 3

—第6次調査の報告—



2008

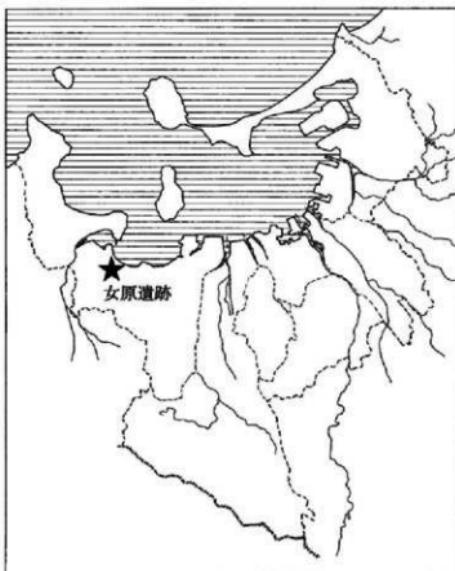
福岡市教育委員会

みょう

ぱる

女原遺跡 3

—第6次調査の報告—



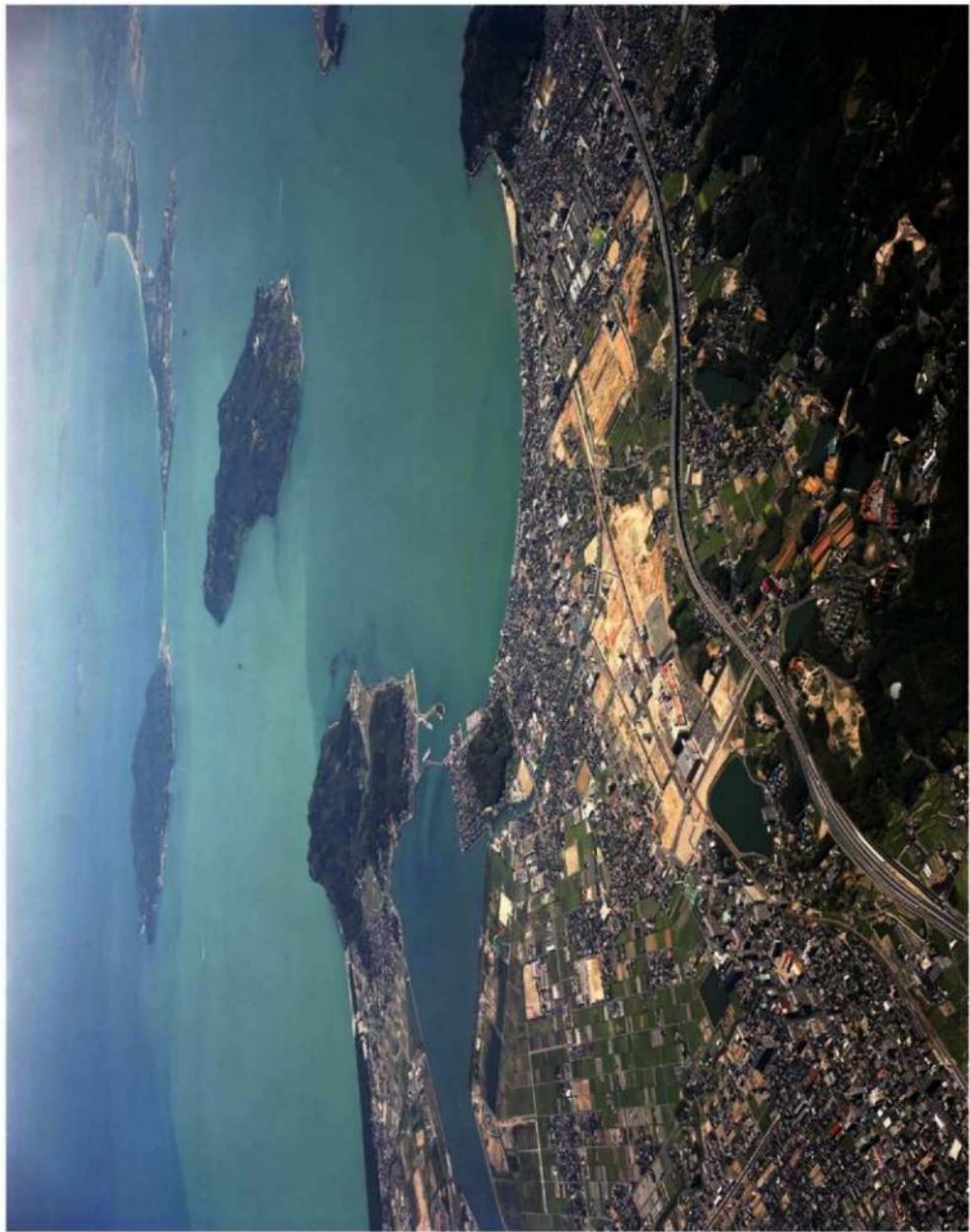
調査番号 0625

遺跡略号 MBR-6

2008

福岡市教育委員会

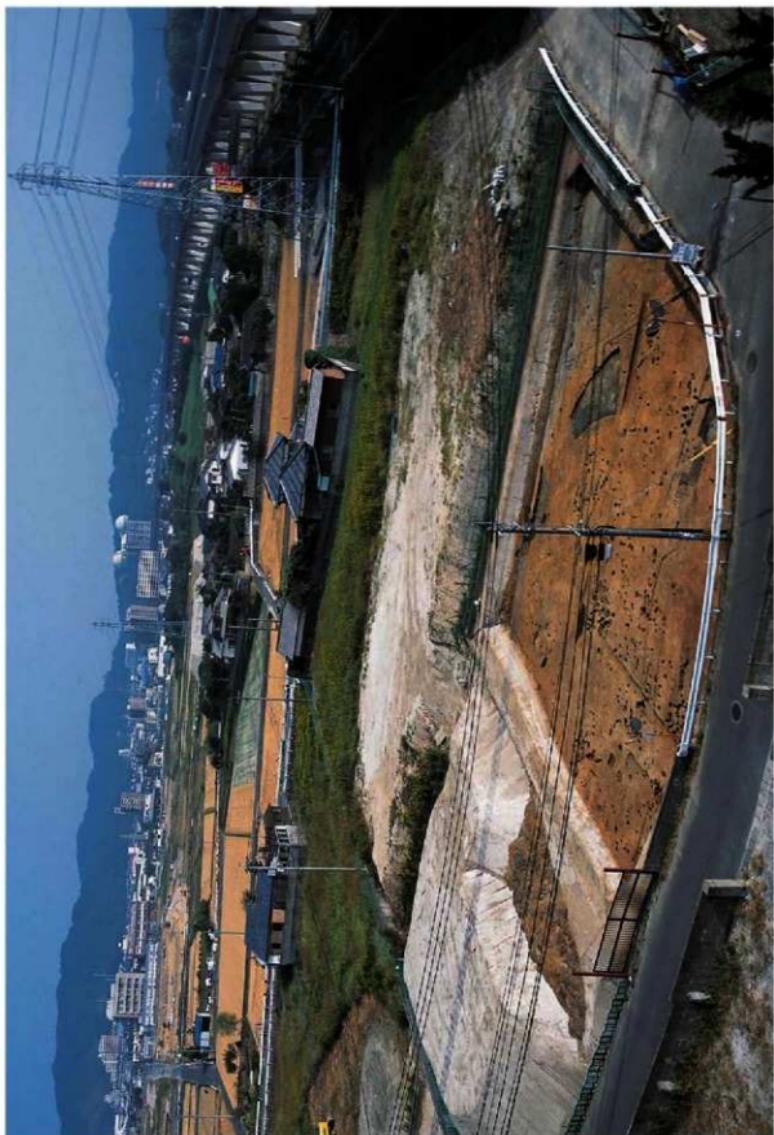
国賀地区U型多段式水門
(伊那区画策部事務所提供)



日本全国の
農業を支える
農業機械



豊賀城から大津古墳を望む





1) 調査地北側



2) 調査地南側

一九四八年(昭和二十三年)四月七日 米軍機撮影中写真に一部加筆



序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存につとめているところです。

本書で報告いたします女原遺跡周辺では、これまでに弥生時代から古墳時代の住居や古墳などが調査されており、当時の生活用具であるたくさんの土器や石器などの遺物がみつかっています。

今回の調査でも古墳時代の集落が発見され、この地域の歴史を解明する上で貴重な発見となりました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた関係者各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が2006（平成18）年度に福岡市西区大字女原地内において伊都土地区画整理事業に伴い行った女原遺跡第6次調査の発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は福岡市教育委員会が行い、調査担当は加藤隆也である。
- (3) 遺構実測・撮影は加藤が行い、各調査区の空中写真は空中写真企画が行った。
- (4) 出土遺物の整理作業は田中由紀、加集和子、山口とし子、川田京子、菊田律子が行った。
- (5) 出土遺物の実測・撮影は加藤が行い、製図は加集が行った。
- (6) 本書に使用した方位は国土座標の座標北であり、真北から $0^{\circ}19'$ 西偏している。今回の調査・報告に係る座標は伊都土地区画整理事業に伴い設置された基準点（日本測地系）を使用している。
- (7) 今回の調査に伴う出土資料および記録類は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、利用に供する予定である。

遺跡調査番号	0625	遺跡略号	MBR-6
地番	福岡市西区大字女原49-1他	分布地図番号	周船寺120
調査対象地	3,185m ²	調査面積	2,580m ²
調査期間	平成18年6月14日～平成18年11月1日		

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の記録	8
1. 調査の概要	8
2. 遺構と遺物	8
3.まとめ	24

挿図目次

Fig. 1 今宿平野遺跡分布(1/25,000)	2	Fig.13 SC-06, 07, 08出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	16
Fig. 2 調査地点と周辺遺跡(1/6,000)	3	Fig.14 SB-01実測図(1/60)	17
Fig. 3 調査区位置図(1/600)	5	Fig.15 SK-01, 02, 03実測図(1/40)	19
Fig. 4 調査区北側遺構配置図(1/300)	6	Fig.16 SK-04, 05, 06, 07実測図 (1/40, 1/30)	20
Fig. 5 調査区南側遺構配置図(1/300)	7	Fig.17 SK-08, 09, 10, 11、SP-01実測図 (1/30, 1/20)	21
Fig. 6 SC-01, 02出土遺物実測図(1/40)	9	Fig.18 SK-01, 04, 09, 10出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	22
Fig. 7 SC-01, 02出土遺物実測図(1/4)	10	Fig.19 SK-11出土遺物実測図(1/4)	23
Fig. 8 SC-03実測図(1/40)	11	Fig.20 その他の遺物実測図 (1/1, 1/2, 1/4)	24
Fig. 9 SC-04, 05実測図(1/40)	12		
Fig.10 SC-03出土遺物実測図(1/4)	13		
Fig.11 SC-06, 07実測図(1/40)	14		
Fig.12 SC-08実測図(1/40)	15		

図版目次

巻頭写真1	調査地と博多湾を望む（伊都区画整理事務所提供）
巻頭写真2	調査地から可也山を望む
巻頭写真3	調査地から大塚古墳を望む
巻頭写真4	1) 調査地北側 2) 調査地南側
巻頭写真5	1948（昭和23）年4月7日 米軍撮影空中写真に一部加筆
PL. 1	1) 第1区調査地（南から） 2) 第2区調査地（南から）
PL. 2	1) 第3区調査地（南から） 2) 第4区調査地（東から）
PL. 3	1) 第5区調査地試掘状況（北から） 2) 第5区試掘トレンチ状況（北から） 3) SC-01検出状況（北西から） 4) SC-02検出状況（北東から）
PL. 4	1) SC-03検出状況（北西から） 2) SC-04検出状況（北東から） 3) SC-05検出状況（南東から） 4) SC-06検出状況（北東から）
PL. 5	1) SC-07検出状況（北西から） 2) SC-08検出状況（南東から） 3) SB-01検出状況（北東から） 4) SK-04検出状況（北東から）
PL. 6	1) SK-08検出状況（南西から） 2) SK-10遺物出土状況（北西から） 3) SK-11遺物出土状況（北東から） 4) SP-01遺物出土状況（南から）
PL. 7	出土遺物（縮尺不同）
PL. 8	出土遺物（縮尺不同）

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

今回報告する発掘調査は伊都土地区画整理事業に伴う造成に先立つものである。伊都土地区画整理事業は福岡市西部、今宿平野の東半部を対象に計画された区画整理事業である。施工面積は約130haである。その範囲はかつての潟湖である今宿砂丘後背地を中心とし、高祖山麓の台地を含む範囲に及んでいる。今宿平野には国指定史跡の大塚古墳を含む今宿古墳群をはじめ多種多様な埋蔵文化財があり、多くの周知の埋蔵文化財包蔵地が分布している。

1996(平成8)年11月、都市整備局伊都区画整理事務所から区画整理地内の埋蔵文化財について確認調査の依頼があった。福岡市教育委員会埋蔵文化財課では、計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地および隣接地を含むことから、事業地全体について遺跡の遺存状態の確認のための試掘調査が必要と判断し、区画整理事務所と協議を重ね、試掘可能な地点について調査を実施することになった。試掘調査は1996年12月から1997年2月にかけて計68箇所の地点に及んだ。

試掘調査の結果、事業計画地内の埋蔵文化財の遺存状態についての様相を把握することができた。遺跡の分布範囲は、筑堤線上に沿う砂丘後背湿地部分では埋蔵文化財分布の可能性がなく、計画地南縁部である山麓の丘陵部側に埋蔵文化財の分布が確認できるというものであった。

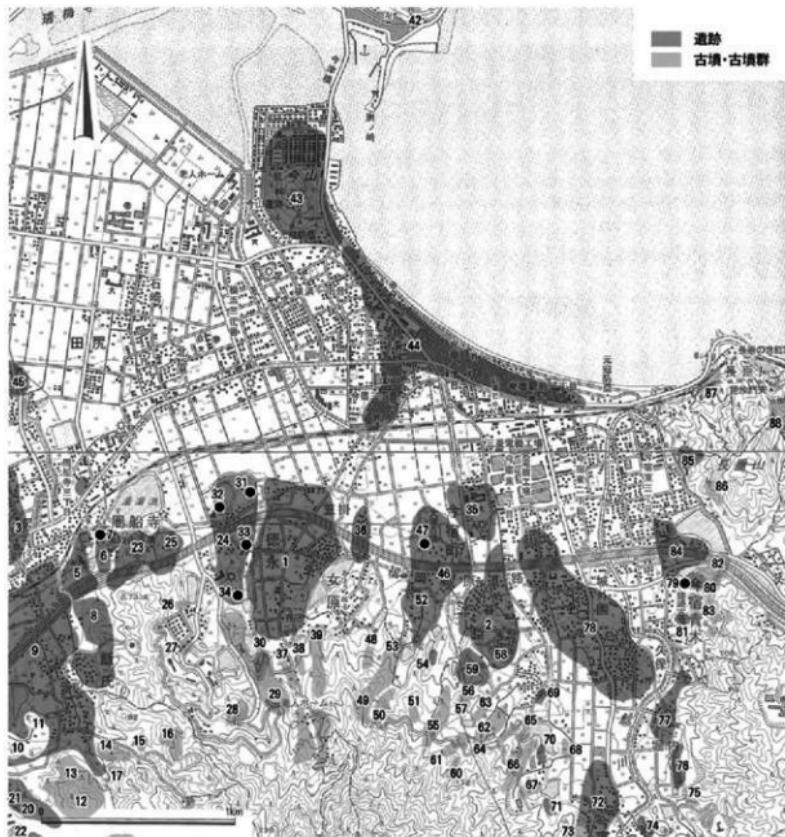
広大な事業地を対象とした試掘調査では、各地点についての埋蔵文化財の詳細な分布範囲、遺構の密度などを詳らかにできることできなかった。そこで、工事工程との調整を行いながら、必要範囲について詳細な試掘（確認調査）を行い、埋蔵文化財の内容を確認したうえで本調査に着手するという手順をとることとなった。

今回報告する女原遺跡地内の確認調査は2006年5月16日から18日にかけて行い、台地の上にて土壤、柱穴の遺構と遺物がみられ、埋没谷には埋蔵文化財の分布は広がらないことを確認した。本発掘調査は、広域確認調査の開始からちょうど10年が経過した2006(平成18)年6月14日から11月1日まで行った。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	植木とみ子（前任） 山田裕嗣
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課 埋蔵文化財課第2課	課長 調査第1係長	力武卓治 池崎譲二（前任） 杉山富雄
庶務担当	文化財管理課	管理係	後藤泰子（前任） 井上幸子
事前協議	埋蔵文化財第1課	事前審査係長 事前審査係	濱石哲也（前任） 吉留秀敏 星野恵美
調査担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	加藤隆也
整理作業	田中由紀 加集和子 山口とし子 川田京子		菊田律子



- 1 女原遺跡 2 谷遺跡 3 周船寺遺跡群 4 山崎遺跡 5 遠町遺跡 6 丸根山遺跡群 7 丸根山古墳 8 比佐引地遺跡 9 比佐遺跡群 10
 比佐古墳群A群 11 児童古墳 12 比佐古墳群B群 13 比佐B14号墳 14 比佐古墳群C群 15 比佐古墳群D群 16 比佐古墳群E群 17
 比佐古墳群F群 18 比佐古墳群G群 19 比佐古墳群I群 20 比佐古墳群J群 21 千里中原遺跡 22 千里澤谷B遺跡 23 徒永A遺跡 24
 徒永B遺跡 25 徒永古墳群A群 26 徒永古墳群C群 27 徒永古墳群D群 28 徒永古墳群G群 29 徒永古墳群H群 30 女原上ノ谷製鉄跡
 31 山ノ鼻1号墳 32 山ノ鼻2号墳 33 若八幡宮古墳 34 下谷古墳 35 今宿五郎江遺跡 36 女原笠置遺跡 37 女原古墳群A群 38
 女原古墳群B群 39 女原古墳群C群 40 女原古墳群D群 41 女原古墳群E群 42 今津古墳群H群 43 今山遺跡 44 今宿遺跡群 45 今
 宿田尻遺跡 46 大槻遺跡 47 大槻古墳 48 新開古墳群B群 49 新開古墳群C群 50 新開古墳群D群 51 新開古墳群E群 52 新開古墳
 群F群 53 新開底跡 54 新開製鉄遺跡 55 谷上古墳群A群 56 谷上古墳群B群 57 谷上B1号墳 58 谷上古墳群C群 59 香木城跡 60
 相原古墳群A群 61 相原古墳群B群 62 相原古墳群C群 63 相原古墳群D群 64 相原古墳群E群 65 相原古墳群F群 66 相原古墳群G
 群 67 相原古墳群H群 68 相原古墳群J群 69 相原製鉄A遺跡 70 相原製鉄B遺跡 71 相原製鉄C遺跡 72 本村遺跡 73 本村古墳群
 A群 74 烟山製鉄遺跡 75 烟山古墳群B群 76 眼ノ内製鉄遺跡 77 眼ノ内遺跡 78 青木遺跡群 79 鶴崎古墳 80 鶴崎製鉄A遺跡 81
 鶴崎製鉄B遺跡 82 鶴崎古墳群A群 83 鶴崎古墳群B群 84 鶴崎遺跡 85 ショウガ谷製鉄跡 86 油坂古墳群A群 87 油坂古墳群B群
 88 長塚山古墳群

Fig. 1 今宿平野遺跡分布(1/25,000)

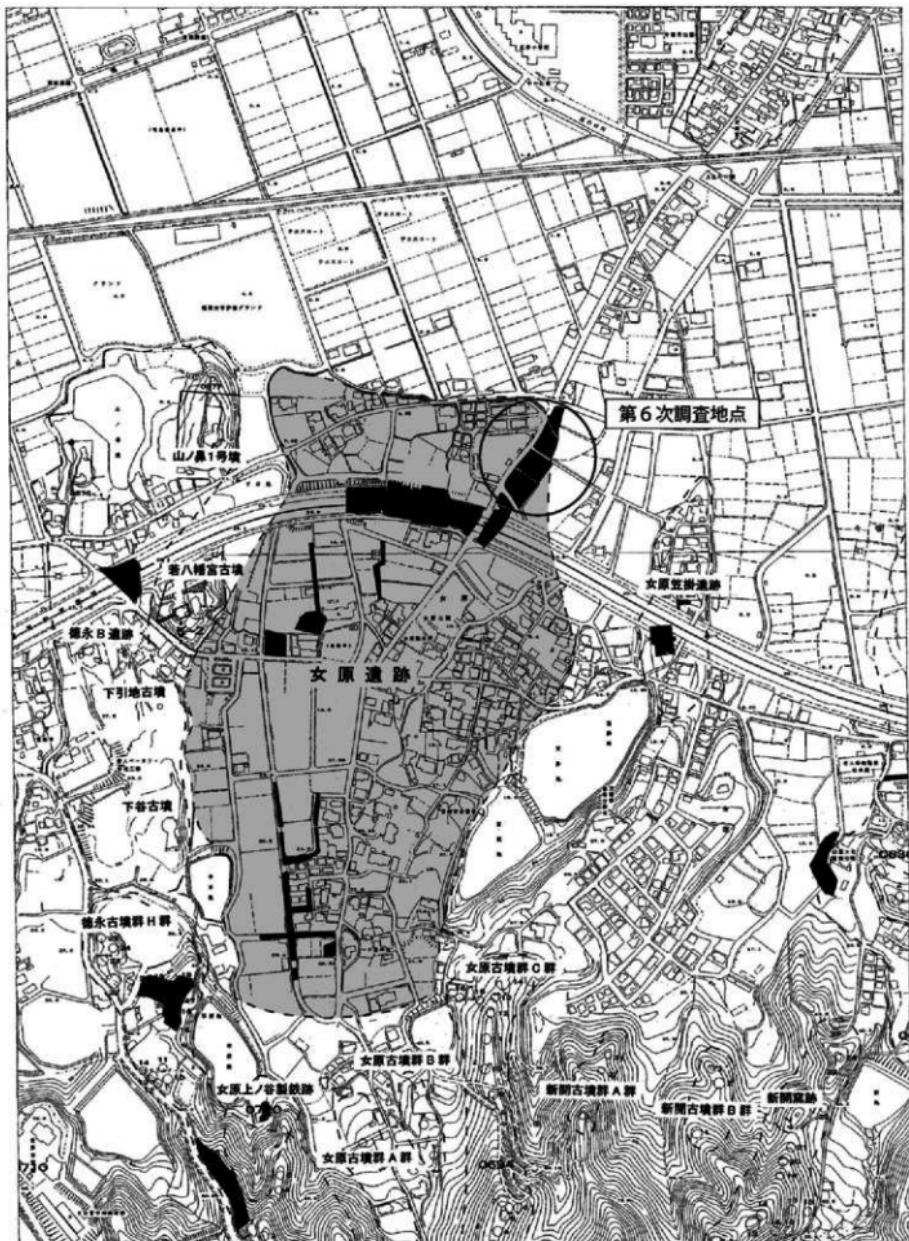


Fig. 2 調査地点と周辺遺跡(1/6,000)

第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

女原遺跡は高祖山麓から今宿平野を今津湾に向かって伸びる丘陵の末端部にあたる。今津湾沿岸には博多湾内海流の左流転による砂丘が早くから発達する。国の天然記念物に指定されている（含紅雲母ペグマタイト岩脈）のある長垂山から今山にかけてのこの砂丘はT字形を呈しており、その基部は本調査地点へと延びており、ちょうど女原を境として東の今宿側と西の今津湾側との後背湿地（ラグーン）を分ける地形となっている。

当該地周辺には、各時代にわたる多くの遺跡が位置している。旧石器時代遺物は、周船寺遺跡にて三稜尖頭器がみつかるなど、分布はあるものの遺跡として調査された例はない。縄文時代遺物も以前から同様に埋没谷などからみつかっていた。近年、隣接する徳永B遺跡の調査により、中期後半の阿高式の埋甕が出土したとの報告がされている。弥生時代では、博多湾に面した今宿砂丘上の今宿遺跡群から前期から後期にいたる遺物が出土しており、特に前期から中期にかけての豪棺墓、土墳墓群は全域に広がっている。そして、その砂丘の北西端に連なる今山遺跡は、前期に生産が開始され、中期には大分県、熊本県域まで供給された玄武岩製大型蛤刃石斧の原産地であり、かつ生産地である。この石斧は樹木伐採用のもので、当時の人々が森林を切り開き集落と耕地の拡大を急速に進めた証として考古学上重要な資料である。

古墳時代では、国指定史跡の大塚古墳、山ノ鼻古墳、若八幡宮古墳、丸隈山古墳など丘陵末端部台地上に大型の前方後円墳が前期から後期にかけて継続して造営される。さらに、山麓部には後期の群集墳が濃密に分布する。また最近、新聞等にて報道されたように「寶」の字が刻まれた銅印が出土するなど古代から中世の遺物、遺跡も多く発見されている。

女原遺跡既往調査

第1次調査

ほ場整備事業に伴い、1985年度に調査を行った。3,000m²の調査を行い古墳時代後期の集落などを調査している。

第2次調査

ほ場整備事業に伴い、翌年1986年に調査を行い、2,270m²の調査を行い古墳時代の集落を調査している。

第3・4次調査

一般国道202号線バイパス建設に伴う調査で、1986、1987年の二ヶ年に分けて調査を行った。8,000m²の調査区で、古墳時代の堅穴住居、掘立柱建物、土壌、溝状遺構、古代末から中世にかけての掘立柱建物、水田などが検出されている。特に古墳時代遺物には陶質土器や軟質土器がみられ注目される。
(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第224集)

第5次調査

1997年、宅地造成地の道路部分について282m²の調査を行った。弥生時代中期、古墳時代後期の柱穴群と住居の可能性をもつ浅い堅穴状遺構、中世から近世にかけての溝を検出している。
(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第616集)

Y=68100

Y=68050

Y=68000

X=63750

第1区

第2区

X=63700

第3区

X=63650

第4区

第5区

X=63600

Fig. 3 調査区位置図(1/600)

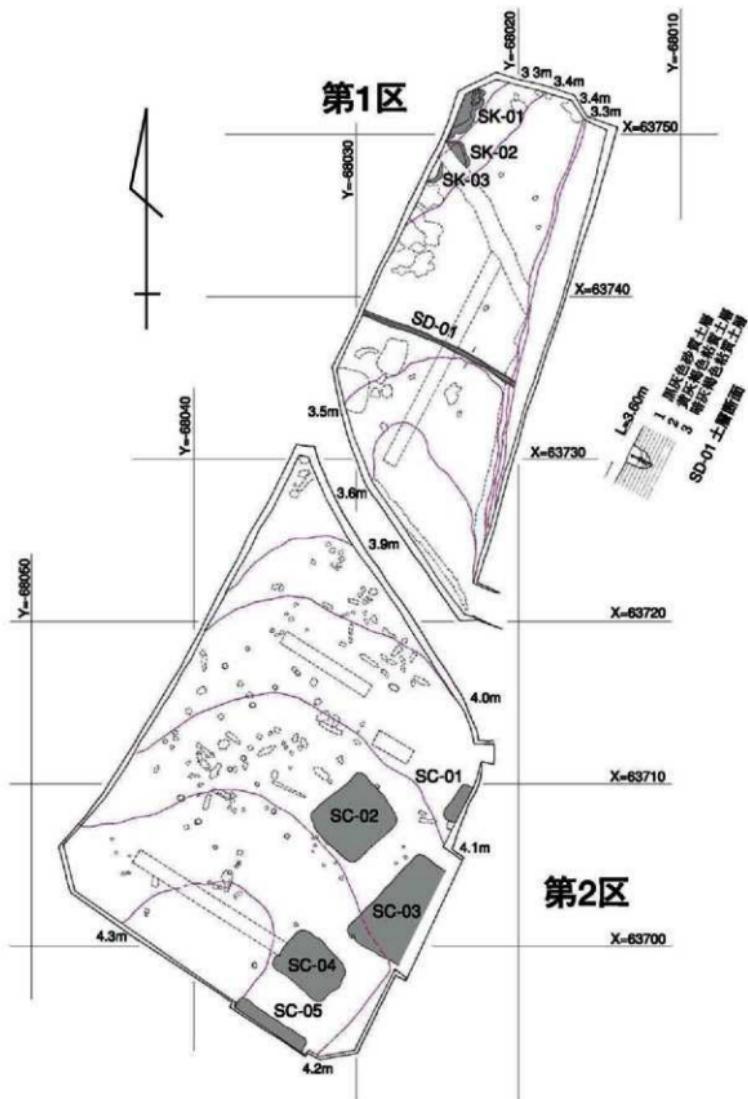


Fig. 4 調査区北側遺構配図(1/300)

第3区

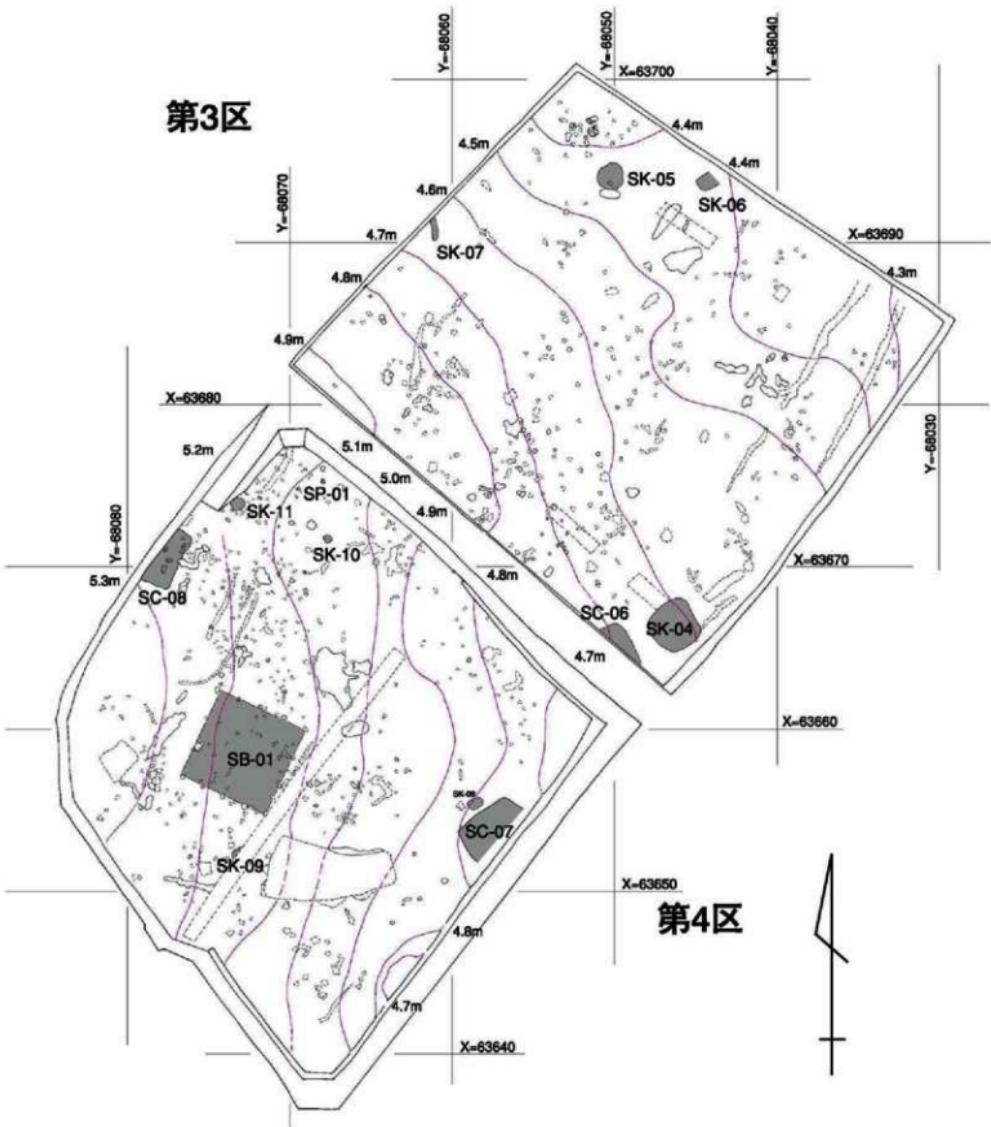


Fig. 5 調査区南側遺構配置図(1/300)

第三章 調査の記録

1. 調査の概要

女原遺跡第6次調査地点は高祖山から北へ延びる丘陵の裾部に位置する。東側600mには国指定史跡大塚古墳、西側450mには若八幡宮古墳、400mには山ノ鼻1号墳が位置している。また、南側隣接地は第3・4次調査が実施されており、古墳時代の集落が検出され、陶質土器、軟質土器が出土している。調査前は水田、畑地、雑種地であった。

調査は水路、道路、ブロック塀などにより調査区を北から5区に分けて調査を行い、第1から第5区と呼称した。第5区調査地の隣接地は、1986年の調査時に検出した庇を持つ建物が広がる重要な地点であったが、国道202号バイパスが数mの盛土上にあり、周辺はそれにあわせるように1m以上の盛土が行われており、バックホーにより試掘を行ったが湧水が著しく、調査範囲が狭小なこともあり協議の結果、発掘調査不可能との判断をした。

第1区から第5区までの遺構検出面は、基本的には黄褐色粘質土層上面であり、その上面には部分的に黒茶褐色粘質土の遺物包含層がみられた。その上面に床土、耕作土という層序である。第4区には、その上面に1mを超える盛土がされていた。調査は北側の第1区から着手し、第2区、第3区とすすめ、第4区は表土の土量が多いため、第3区の調査終了を待って、表土を第3区側に搬出して調査を行った。検出した遺構の密度は高くないが、生痕や降雨による雨裂と思われる不定形のシミ状のものや溝状の痕跡が結果的に多数みられたが、人為的なものかどうかは掘削して判断せざるを得ず、多くの調査時間が割かれた。

2. 遺構と遺物

竪穴住居 (SC)

今回の調査では8軒の竪穴住居跡を検出した。住居跡の分布は散漫であり、住居跡どうしや他の遺構との切り合い関係はなかった。竪穴住居の遺存が決して悪いというわけではないが、その主柱穴や炉、カマドの位置など具体的な構造を把握することができなかつた。周辺調査においても、住居の構造を示す遺構の検出が難しく、痕跡を残しにくい構造をもつものと思われる。つまり、今回も平面プランが方形または長方形等を呈するものをこの項で取り上げており、そのすべてが竪穴住居であるとの判断はできない。

SC-01 (Fig. 6, 7, PL. 3.)

第2区東側端にて検出した。遺構の大半は調査区外へ広がる。平面の一辺が2.4mの隅丸の四角形を呈する竪穴住居と考えられる。検出面から住居の床面まで約15cmが残存しており、壁の際には小溝がめぐっている。住居跡としては、いたって小型であるため住居跡以外の可能性も考えられる。主柱穴や炉などの性格を示す構造的なものは不明である。出土遺物出土遺物は主に北側隅の壁際溝の上面から出土した。1、2は小型丸底壺である。1は内外面にハケメの痕跡が残り、内面底には指頭圧痕がみられる。口径10.0(復元)、器高11.2cmである。2は壺の上部である。下部片も出土しているが直接接合しなかつた。全体に摩滅が著しく、内面にヘラケツリの痕跡がみられる。口径7.6cm(復元)である。遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期中葉頃と考えられる。

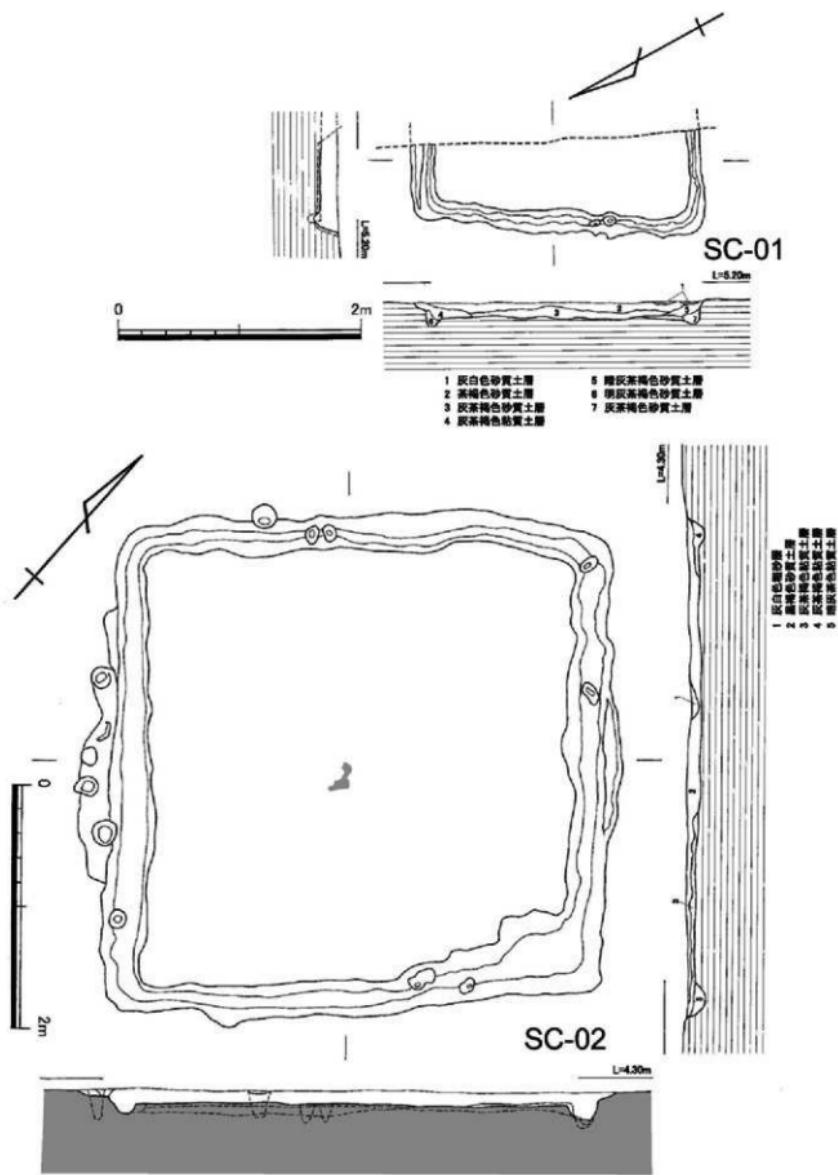


Fig. 6 SC-01, 02実測図(1/40)

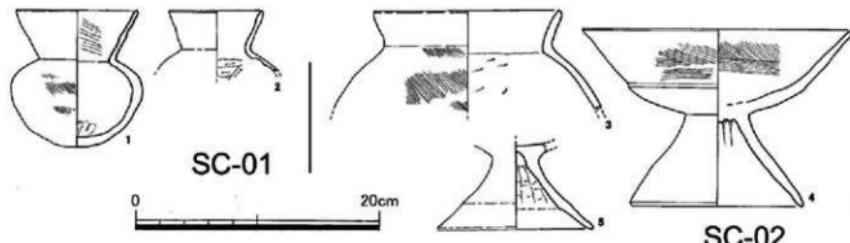


Fig. 7 SC-01, 02出土遺物実測図(1/4)

SC-02 (Fig. 6, 7, PL. 3)

第2区中央部東寄りにて検出された。平面プランは、 $4.2m \times 4.1m$ のほぼ方形を呈すると考えられる。壁の際には幅20~30cmの溝が一周している。検出面から床面までは約15cm残存していた。南西側の辺には浅い段がみられた。住居の中央部に被熱により赤色化した焼土がみられたが、その範囲は限られる。調査後床面を更に掘削したが、柱穴等は確認されなかった。出土遺物3は壺の上部破片である。外面はハケメ、内面にはヘラケズリが残る。口径15.2cm(復元)である。4は高杯で全体の約2/3が残存する。杯部の下部には稜がつき、脚部は直線的にひらく。口径22.1、脚径14.2、器高14.5cmである。5は高杯の脚部の破片である。直線的にひらき、内面にはヘラケズリの跡が残る。口径12.8cm(復元)である。遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期のものと考えられる。

SC-03 (Fig. 8, 10, PL. 4)

第2区の東端にて検出した。遺構の一部は調査区外へ広がる。平面形は長軸6.7m、短軸は4m前後の長方形プランを持つ住居跡と思われる。今回確認された住居で最も規模の大きいものである。遺構検出面から床面まで約10cmの残存であった。住居の南西側には幅10~20cmの溝がみられるが、その内と外での床面の高さに変化はみられなかった。調査後床面を更に掘削したが、柱穴等住居の構造を示す遺構は確認されなかった。出土遺物6は小型の壺である。住居内南西側の溝寄りの床面上にて出土した。胴部の最大径は下部にあり、底部は平坦で、色調は赤褐色を呈する。口径7.1(復元)、器高8.6cmである。7は須恵器壺の口縁部破片である。住居内北東側床面上にて出土した。口縁は緩やかにひろがり、外面頸部上には波状文がみられる。口径は20.0cm(復元)である。遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期のものと考えられる。

SC-04 (Fig. 9, PL. 4)

第2区南側、SC-03の南側にて検出した。一部試掘調査トレンチに切られる。遺構の平面形は不定形である。北西側は直線的なラインを示すが、その他の辺は曲線を呈し壁の立ち上がりも緩やかである。壁際の溝はみられなかった。遺構検出面から床面まで約15cmである。検出面での長軸長4.2m、短軸長2.9mである。住居内にて幾つかのピットを確認したが上屋構造を支えるような配置では確認されなかった。出土遺物覆土から須恵器壺の小片が出土している。周辺の状況から古墳時代後期の遺構と考えられる。

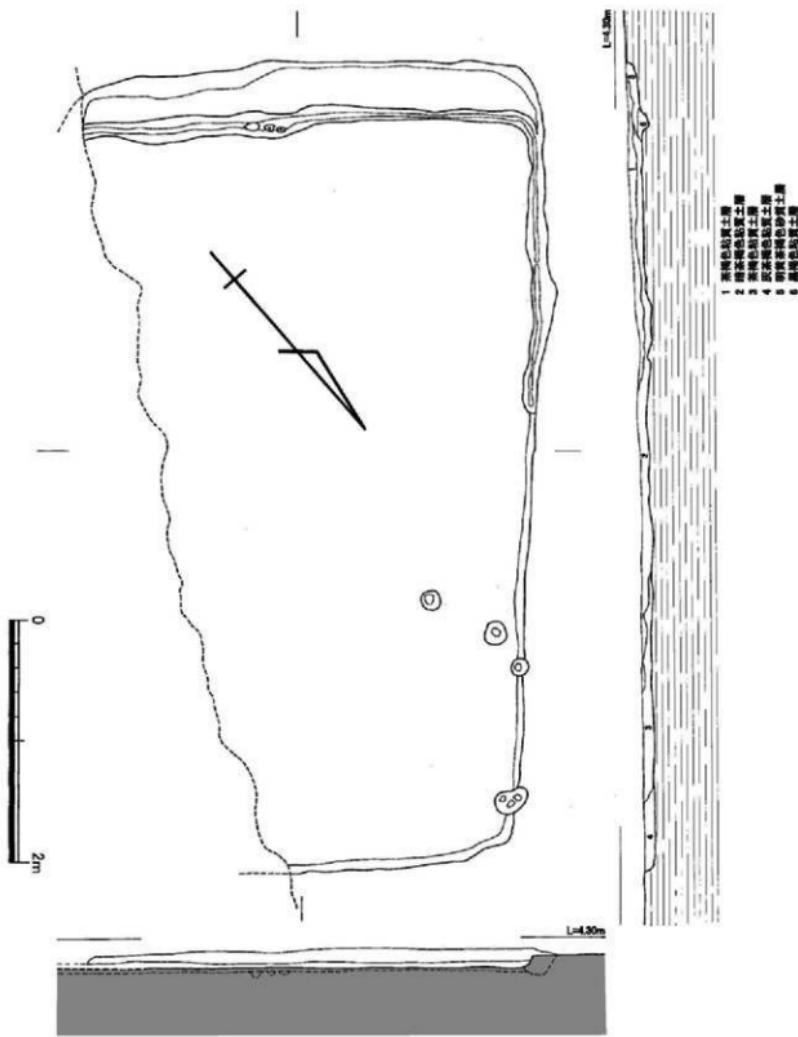


Fig. 8 SC-03実測図 (1/40)

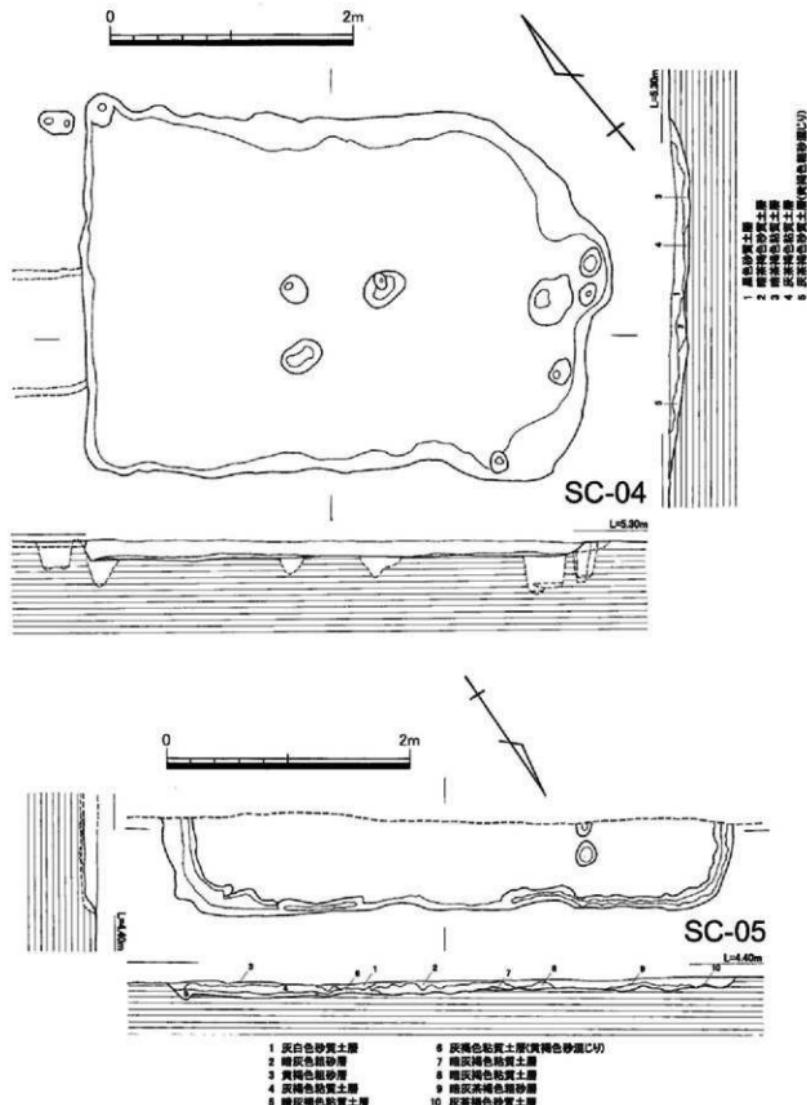


Fig. 9 SC-04, 05実測図(1/40)

SC-05 (Fig. 9, PL. 4)

第2区の南調査区壁際にて検出された。遺構の大半は調査区外道路側に広がる。平面形は隅丸の四角形を呈すると思われ、確認された辺の長さは4.7mである。遺構検出面から床面まで約10cmである。確認された辺の中央一部を除いて両側には幅10～20cmの溝があがる。主柱穴など住居の構造を示す遺構は確認されなかった。出土遺物覆土から須恵器壊身小片が出土している。立ち上がりの口縁部に段をもち、内傾する。のことから、この遺構は古墳時代後期には埋没をしていたと考えられる。

SC-06 (Fig. 11, 13, PL. 4)

第3区の南西隅にて検出された。遺構の大半は調査区外に広がる。平面形は隅丸の四角形を呈するものと思われ、隅部分が確認された。遺構検出面から床面まで約20cmであり、床面は平坦である。壁際に溝はみられず、約5～10cmの貼床が確認された。床面隅の一部で、炭と焼土の混じった面が確認された。主柱穴など住居の構造を示す遺構は確認されなかった。出土遺物8、9は甕で、復元によりほぼ完形にもどった。8は胴部の最大径は中央にあり、口縁は直線的に広がる。口径12.1、器高14.7cmである。9はやや長胴化しており、口縁はやや外反する。外面には長い縱方向のハケメが残り、内面はヘラケズリである。口径15.5、器高24.7cmである。遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期後半頃と考えられる。

SC-07 (Fig. 11, 13, PL. 5)

第4区東側壁際にて検出された。東側を流れる谷により一部削られており、遺構は調査区外に広がる。遺構検出面から床面まで約15～30cmあり、北側に向けて緩やかに傾斜している。壁際に幅5～10cmの溝がみられる。主柱穴など住居の構造を示す遺構は確認されなかった。出土遺物10、11、12、13は甕である。10は甕の口縁部の破片である。約3/5が遺存し、口縁端部は外側につまみだす。口径15.2cm（復元）。11も上半部の破片で約2/5が遺存し、口縁は二重口縁である。外面は縱ハケ後横ハケが施され、内面はヘラケズリである。口径13.3cm（復元）である。12はほぼ完形に復元することができた。胴部の最大径はやや上方にあり、口縁は曲線を描いて広がる。口径11.2、器高15.4cmである。13も口縁部の一部を除いてほぼ完形に復元された。口縁は短く、胴部は丸みをもつている。赤褐色を呈しており、外面にはハケメ、内面にはヘラケズリが残る。口径8.8、器高8.2cmである。14は高壺の脚部である。途中大きな変化点をもって広がる。外面はナデ、内面には絞り痕とヘラケズリがみられる。口径10.7cmである。15は砥石の破片である。灰褐色を呈する砂岩質の石材である。最低2面を砥石として使用している。遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期中葉と考えられる。

SC-08 (Fig. 12, 13, PL. 5)

第4区西側壁間にて検出された。遺構は調査区外に広がる。遺構検出面から床面まで5cmほどしか残存しておらず、壁の立ち上がりは緩やかであり、平面プランもやや曲線的である。一辺の長さが3.7m以上の規模をもつ竪穴住居と思われる。床面にいくつかのピット状遺構を確認したが、全体

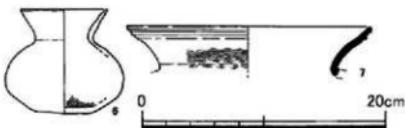


Fig. 10 SC-03出土遺物実測図(1/4)

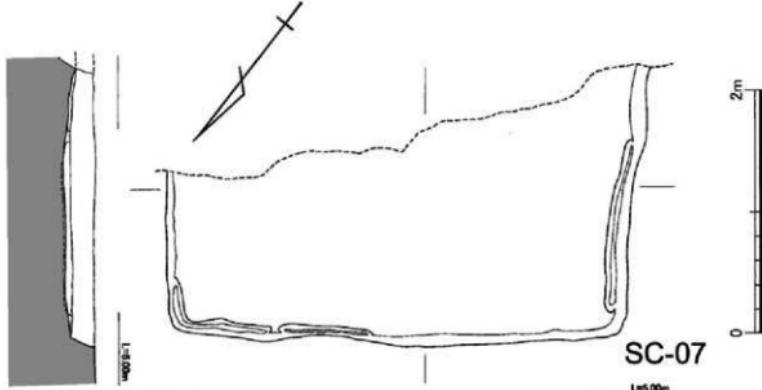
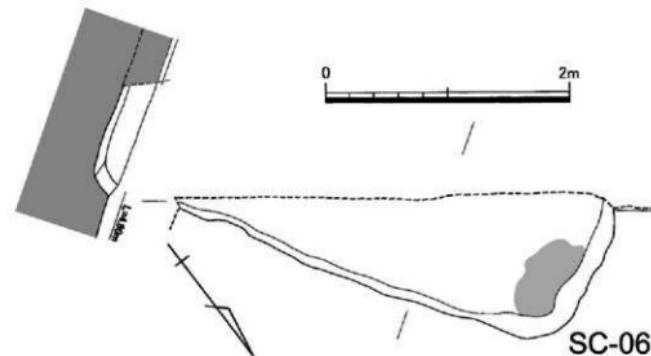


Fig.11 SC-06, 07実測図(1/40)

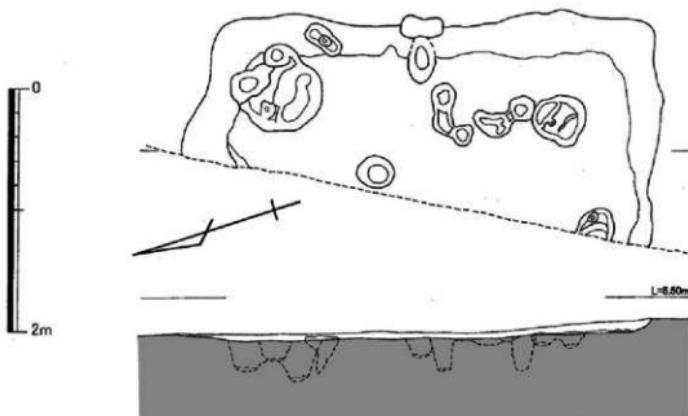


Fig.12 SC-08実測図(1/40)

の様相がわからぬいため、主柱穴は特定できなかった。出土遺物16、17、18は甕である。16は甕上半部の破片であり、胴部は丸みをもち、口縁は外側にふくらみをもって広がる。内面頸部下には指頭圧痕が残り、外面にはハケメ内面にはヘラケズリがみられる。復元口径12.8cmである。17は約1/3残存する。胴部は長く、口縁は外側に膨らみをもって広がる。外面にはハケメ、内面には指頭圧痕とヘラケズリが残る。復元口径12.6cmである。18は甕上部の破片である。口縁は外側に膨らみをもって広がり、外面にはハケメ、内面口縁部にはハケメ、胴部には指頭圧痕とヘラケズリがみられる。復元口径15.3cmである。19は小型の壺である。甕と同様に口縁部は外側に膨らみをもって広がり、胴部はやや肩は張る。20は鉢である。器壁はやや厚くつられており、底部は平坦である。外面は回転ナデ、内面にはハケメ痕が残る。口径12.0、底径4.5、器高4.3cmである。21は高环の环部破片である。外面下に稜を有し、曲線を描いて広がる。外面にハケメが残る。復元口径17.7cmである。22は凹み石である。直径9.5、厚さ7.1 cmの丸みをもった砂岩質のものである。中央部に径約2.5cmの範囲で2mmほど窪んでいる。遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期前半頃と考えられる。

掘立柱建物（SB）

今回の調査では多くのピット状遺構がみつかり、柱穴と思われるものも少なからず確認された。しかし、竪穴住居跡の残存の悪さからもうかがえるように、後世相当な削平がおこなわれており、建物として復元できたのは残念ながら1軒だけである。第2区調査地にて2間×2間、2間×3間の建物かと思われる痕跡がみられた。遺物は出土しておらず、埋土が一定せず、柱痕跡もみられないが、梁側柱間の広さは柱穴が削平により残存していない建物の可能性も考えられる。ここでは記述にとどめておく。

SB-01 (Fig.14, PL. 5)

第4区中央部やや南寄りにて検出された。方位をN-24° - E（座標北）にとる建物である。3間

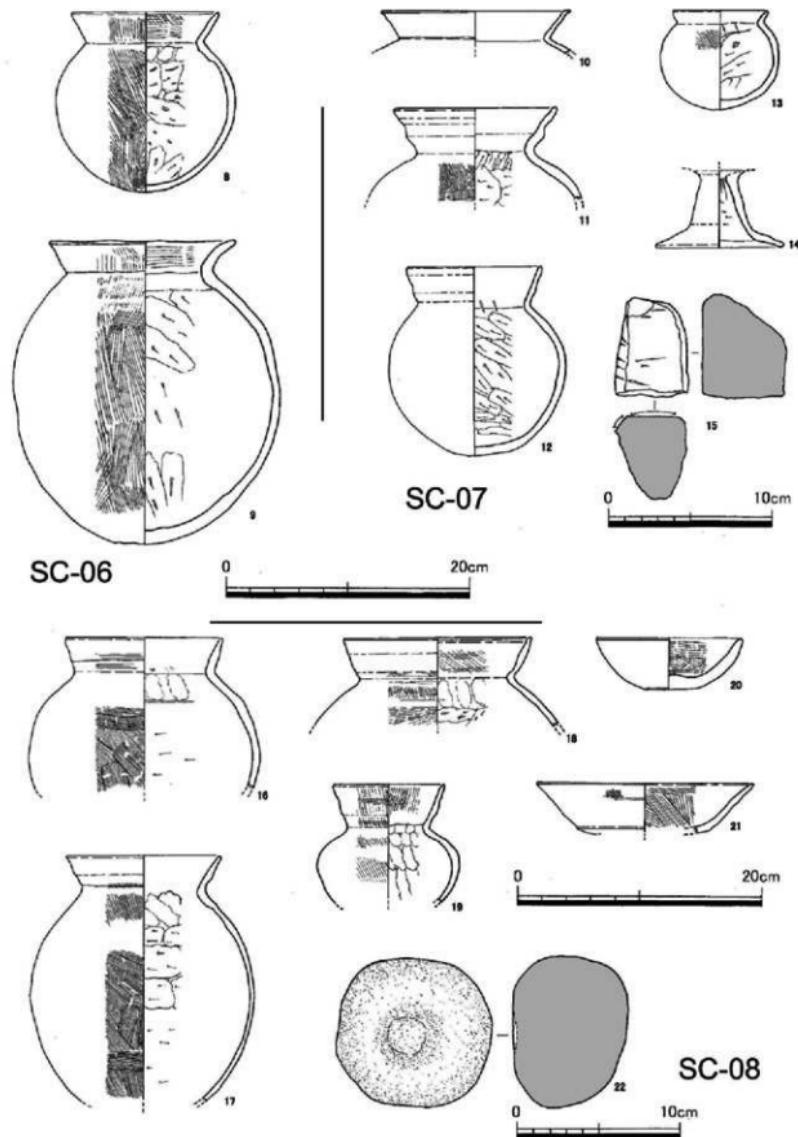


Fig.13 SC-06, 07, 08出土遺物実測図(1/3, 1/4)

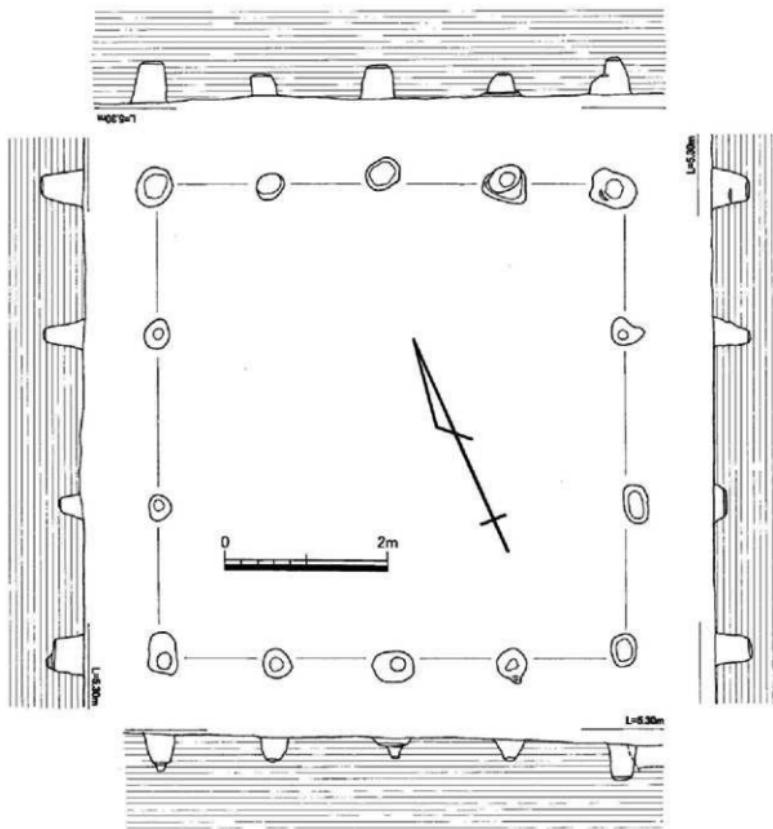


Fig.14 SB-01実測図(1/60)

× 4 間の側柱を確認したが平面プランはほぼ方形を呈する。相対する一対の辺は約5.7mに4本の柱で立て、他の一对は同じく5.7mに5本の柱を立てている。柱穴の平面プランは略円形が主体であり、直径約30～50cm、深さは約15～50cmである。柱穴掘削時、土層断面の観察では柱痕跡はみられなかつたが、掘削後遺構の底面に約10～15cmの柱を立てた痕跡と思われる凹みが残るものがみられた。時代を示す遺物は出土していない。

土壤 (SK)

今回の調査では、遺構検出作業において一定の範囲で地山と異なる土壤が確認された部分を土壤と呼称した。よってその中には決して人為的ではない、ある時期の地表面の窪みのような性格のものも含まれる。この項では11の土壤状の遺構を取り上げる。

SK-01 (Fig.15, 18)

第1区北端にて検出した。遺構は調査区外へとのびる。平面は不定形を呈し、底面も緩やかな傾斜をしている。最も深いところで検出面より約20cmである。遺構覆土は黒褐色粘質土である。出土遺物23は大型蛤刃石斧の刃部破片である。石材は玄武岩であり約3km離れた今山産のものと思われる。

SK-02 (Fig.15)

第1区北端、SK-01の南側にて検出された。遺構の一部を溝により切られる。平面は不定形で、約10cm残る底面にピット状の遺構がみられる。出土遺物はない。

SK-03 (Fig.15)

第1区北端、SK-02の南側にて検出された。遺構の大半が調査区外にのびる。15~20cm残る底面は、やや平坦である。遺構覆土は茶褐色粘質土である。遺物は出土していない。

SK-04 (Fig.16, 18, PL.5)

第3区南東隅、SC-06の北側にて検出した。遺構の中央部を現代水田の暗渠により搅乱されている。平面は略方形を呈しており、長軸長は2.8mである。壁は緩やかであり、底面の一部が 2×1.5 mの範囲で更に深くなっている。最も深いところで検出面より約30cmである。出土遺物では、破片であるが高环の出土比率が高い。24は甕の上部破片である。頸部のくびれは不明瞭で、口縁端部を内側に引き出す。摩滅が著しく内面頸部下に指頭圧痕がみられる。復元口径19.8cmである。25、26、27、28は高环である。25は約半分遺存している。环部は稜をもって大きく屈曲する。脚部の屈曲は緩やかであり、3孔をもつ。环部は充填法で接合されている。环部内外面にはハケメ、外面にはナデ調整がおこなわれている。口径16.4、脚径11.0（復元）、器高11.0cmである。26は半分以上遺存しており、脚はスカート状に広がる。充填法により接合されている。口径18.1、脚径12.4（復元）、器高12.5cmである。27の环部は曲線的に緩やかに立ち上がり、环と脚は付加法により接合されている。口径18.2cmである。28はやや小型で环部の稜の径が小さい。高环の杯部が椀形をしたものは出土していない。図化していないが須恵器の环小破片も出土しており、遺構の時期は古墳時代中期前半頃に位置づけられると考えられる。

SK-05 (Fig.16)

第3区の北側にて検出された。長軸110cm、幅50cm、深さ50cmの圓丸長方形を呈する遺構に不定形の浅い遺構が付くものである。遺構の残存が悪く、遺構検出時には遺構の切り合い関係はみられなかった。出土遺物には土師器表の破片などが出土しているが、図化できるものはない。

SK-06 (Fig.16)

第3区の調査区北端壁際にて検出された。遺構は調査区外に広がる。平面は不定形を呈し、底面まで深いところで遺構検出面から40cmである。出土遺物に図化できるものは出土していない。

SK-07 (Fig.16)

第3区の調査区東側壁際にて検出した。平面は不定形で幅30cm程度の溝状を呈するが、全容が不明のため土壤とした。底面の深いところで約20cm残存しており、底面にピット状の凹みがみられる。

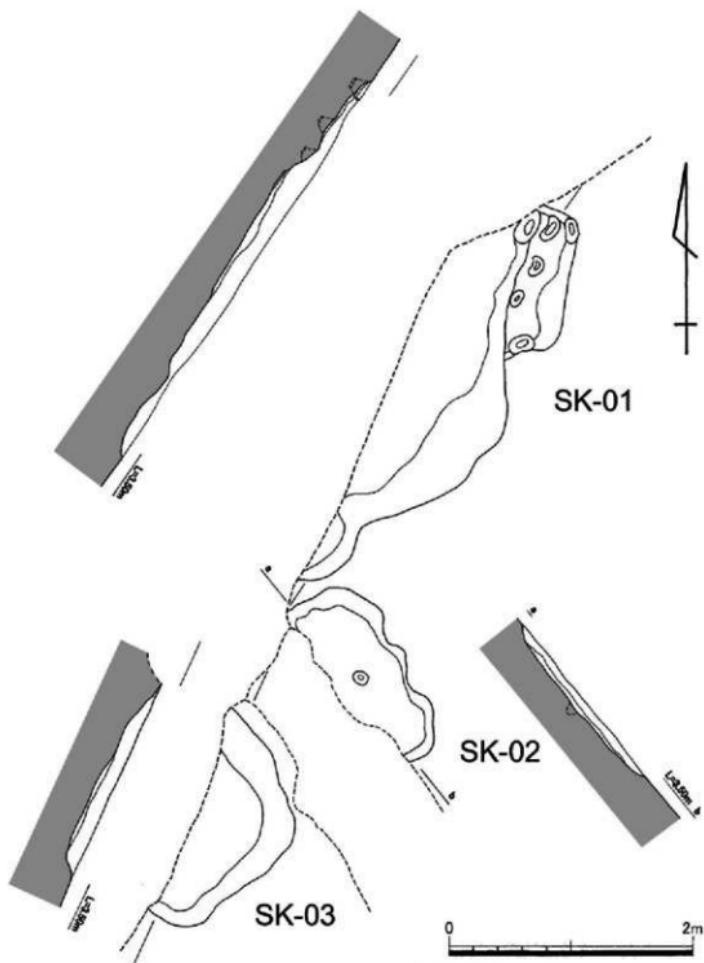


Fig.15 SK-01, 02, 03 実測図 (1/40)

出土遺物に図化できるものは出土していない。

SK-08 (Fig.17, PL. 6)

第4区東側のSC-07の近くで検出された。平面は隅丸長方形を呈しており、長軸95cm、短軸70cmである。底面はほぼ平坦で深さは約25cmであり、壁面は直線的にたちあがる。出土遺物には須恵器片がある。古墳時代後期の遺構と考えられる。

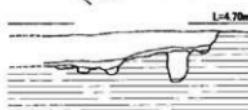
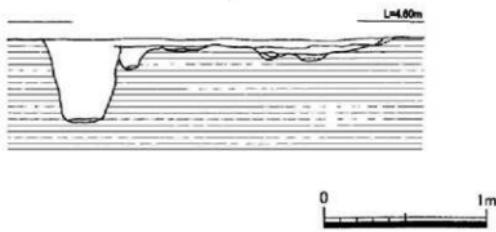
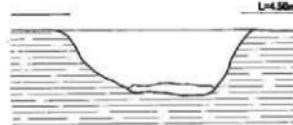
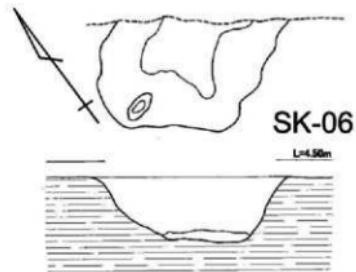
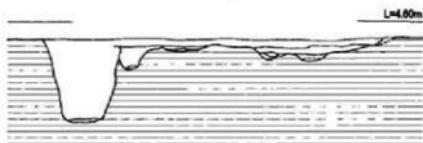
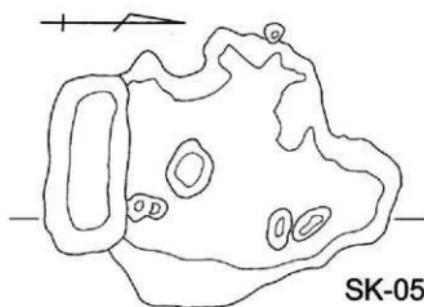
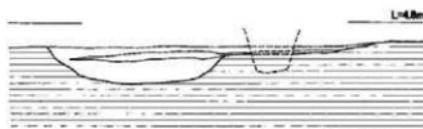
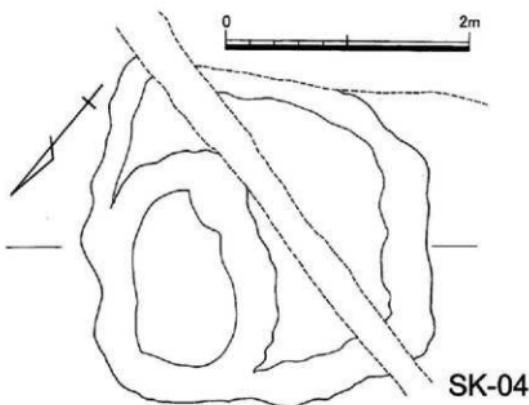


Fig.16 SK-04, 05, 06, 07実測図 (1/40, 1/30)

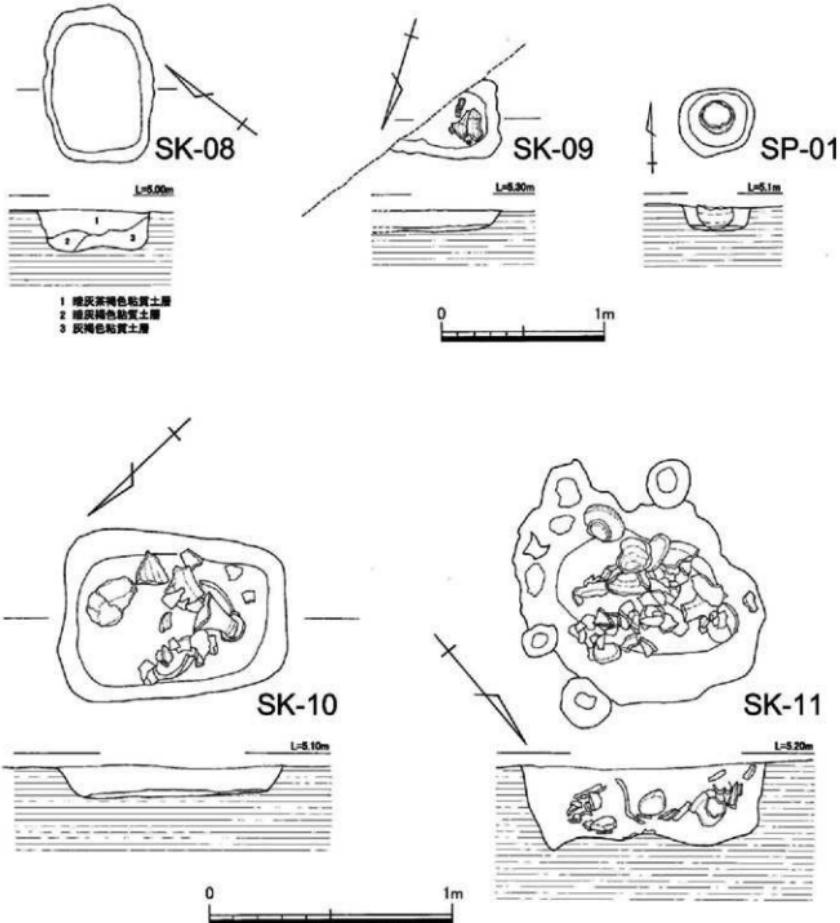


Fig.17 SK-08, 09, 10, 11, SP-01実測図 (1/30, 1/20)

SK-09 (Fig.17, 18)

調査区南寄りにて検出され、一部を試掘調査トレンチに削られる。平面は闊丸長方形を呈すると思われ、幅は約50cmである。底面はほぼ平坦で、深さは約15cm残存し、壁面は緩やかに立ち上がる。出土遺物29は高環の环部破片である。外側下に稜を有するが、丸みをもって外側しながら立ち上がる。復元口径18.9cmである。

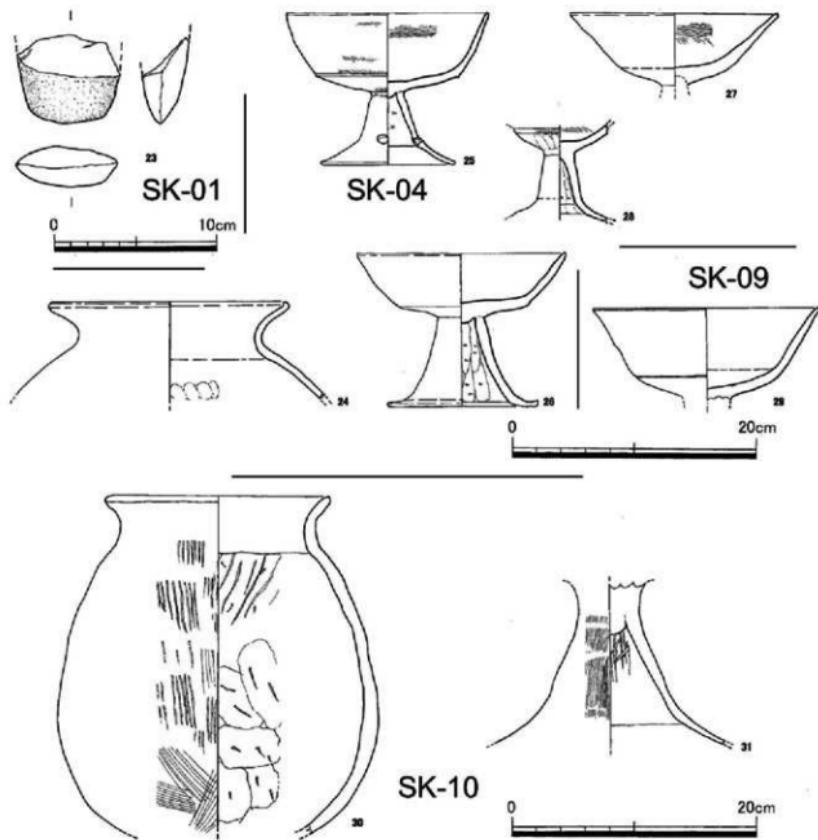


Fig.18 SK-01, 04, 09, 10出土遺物実測図(1/3, 1/4)

SK-10 (Fig.17, 18, PL. 6)

調査区北寄りにて検出された。平面形は卵円長方形を呈し、長軸長90cm、短軸長65cmである。底面はほぼ平坦で、約15cmの深さが遺存していた。壁面は直線的に上方に広がる。出土遺物30は壺である。胸部はやや長胴化しており、最大径は下方にある。頸部のくびれは不明瞭であり、外面には荒いタタキとハケメ、内面にはヘラケズリ痕が残る。口径18.4cmである。31はやや大型の高环脚部である。胎土は密であり、外面にはハケメ、内面には絞り痕とヘラケズリ痕がのこる。遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

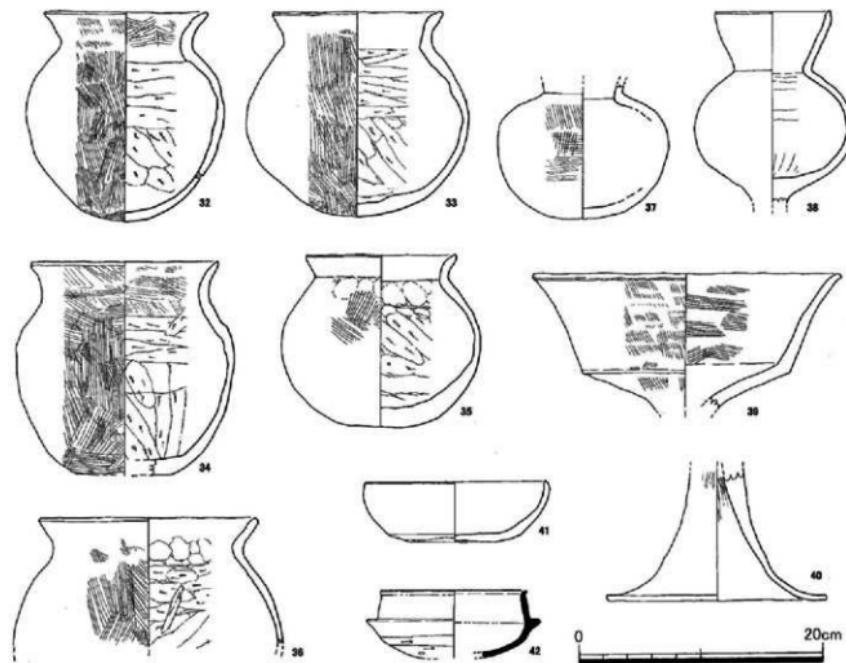


Fig.19 SK-11出土遺物実測図(1/4)

SK-11 (Fig.17, 19, PL. 6)

第4区北側西寄りにて検出された。平面形は複数のピット状遺構と切り合が底面は楕円形を呈する。深さは約30cm 残存しており、多くの遺物が出土した。出土遺物32、33、34、35、36は甕である。32は器壁がやや厚く、口縁は外反しながらひらく。外面と口縁内面はハケメ、内面はヘラケズリである。胸部下に1箇所、焼成後の穿孔がみられる。口径13.3、器高17.1cmである。33の胸部最大径はほぼ中央にあり、口縁の器壁は厚く、外縁しながらひらく。外面はハケメ、内面はヘラケズリである。口径14.1、器高16.8cmである。34は約1/2の破片である。胸部は肩が張り、底部は平坦である。外面は粗いハケメで黒斑がみられる。口縁内面はハケメ、胸部はヘラケズリである。口径15.3（復元）、底径7.8、器高17.5cmである。35は約1/3の破片である。口縁は短く、底部は平坦で器壁が厚い。頭部下には内外面ともに指頭圧痕がみられる。口径12.5（復元）、器高14.1cmである。36は甕上部の破片である。外面はハケメ、内面は指頭圧痕とヘラケズリがみられる。口径18.0cmである。甕の口縁は総じて肥厚して、外反する。37、38は甕である。37の口縁部は失われており不明である。胸部は肩が張り外面にはハケメの痕跡が残る。38は脚环の甕である。口縁は長くのび端部は直立する。口径9.6cm（復元）である。39、40は高环の破片である。同一個体の可能性もあるが、直接接合しない。环部は稜をもって屈曲し、長くのびる。内外面にハケメが残る。脚部は喇叭状に大きく広がる。环部

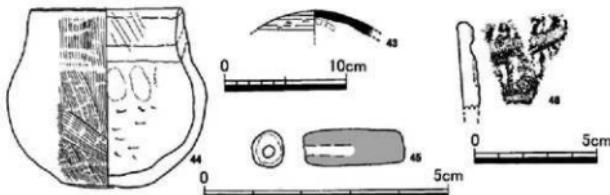


Fig.20 その他の遺物実測図 (1/1, 1/2, 1/4)

口径25.2cm、脚径18.2cmである。41は約1/2残る鉢または椀である。器壁は内側しながらのびる。底部は平坦である。口径14.6（復元）、器高5.0cmである。42は須恵器の壊身破片である。焼成は良好であり、たちあがりは長く端部を外につまみます。口径14.2cmである。図化していないが壺の把手なども出土している。遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期中葉と考えられる。

その他の遺物

SD-02は第1区のほぼ中央を東西に切る溝である。検出された幅は約25cm、深さ30cmである。出土遺物43は須恵器の壊身破片である。SP-01 (Fig.17, PL. 6) は第4区北端にて検出されたピット状遺構である平面は直径約45cmの円形を呈し、深さは15cmを残す。中央に44が置かれていた。44は壺で口縁は直線的にすぼまりながら立ち上がる。底部は平坦である。口径12.5（復元）、底径6.4、器高14.6cmである。SP-30は第3区の南側西寄りにて検出されたピット状遺構である。45は淡緑色を呈する軟質の石管状玉である。直径約7mm、長さ2.1cmである。SX-47は平面不定形の遺構であり、2.5×1.3mの範囲で緩やかな窪み状を呈する。46は縄文時代中期初頭の並木式の土器片である。胎土には多量の滑石片がみられ、外面には爪形文に凹線文が施文されており、新しい様相を呈している。また、遺構精査時、遺物包含層などから多くの黒曜石の剥片、石鏃、石鏃未製品などが出土している (PL.8)。47はSC-02の北側覆土、48は第1区溝内、49は第3区遺構検出時、50は第1区の深い窪地、51、52は第1区遺構検出時にそれぞれ出土している。

3.まとめ

今回の調査では、古くは縄文時代中期初頭に遡る遺物がみつかった。最近では徳永B遺跡でも縄文時代中期後半の土器がみつかるなど、この地の縄文時代の様相が徐々にではあるが明らかになりつつある。そして、今回の調査の大きな成果は、古墳時代中期前半から後期にかけての集落分布状況が明らかになったことがあげられる。南側の国道202号バイパスに伴う第3次、4次調査で確認された古墳時代中期前半期から後期にかけての遺構が、同様に北側へと広がっていることが確認された。ただ残念なことに陶質土器などの遺物はみられなかった。また、後期の遺構は南側の山側で行われた場所に伴う1・2次調査で集落が調査されており、この時期の集落はその密度は高くはないものの、分布範囲は広域にわたるようである。今宿周辺には前方後円墳を含む数百基を数える今宿古墳群が形成されており、その基盤となる集落の時代的な変遷を考える上で、今回の調査成果は貴重な資料を得ることができたと言えよう。今後の調査に対する課題として竪穴住居構造の解明があげられる。今回調査された時期差のある竪穴住居はどれも平面プランが確認されても主柱穴やカマドなどの家屋構造的なもののが把握できぬものが多かった。痕跡が残りにくい立柱構造も視野に入れながら今後の調査成果に期待したい。

図 版
(PLATES)





1) 第1区調査地（南から）



2) 第2区調査地（南から）



1) 第3区調査地（南から）



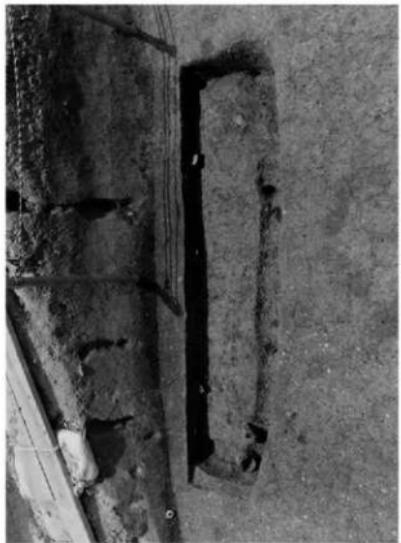
2) 第4区調査地（東から）



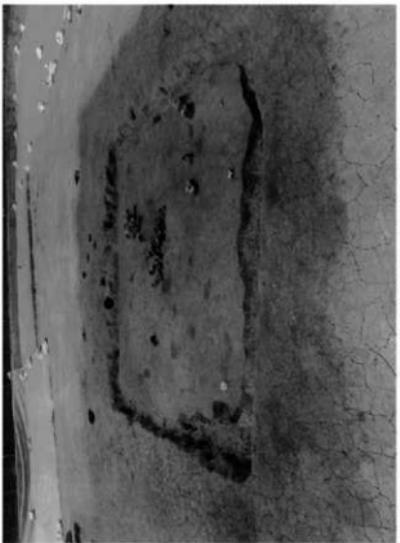
1) 第5区調査地試験状況 (北から)



2) 第5区試験トレンチ状況 (北から)



3) SC-01検出状況 (北西から)



4) SC-02検出状況 (北東から)



1) SC-03検出状況 (北西から)



2) SC-04検出状況 (北東から)



3) SC-05検出状況 (南東から)



4) SC-06検出状況 (北東から)



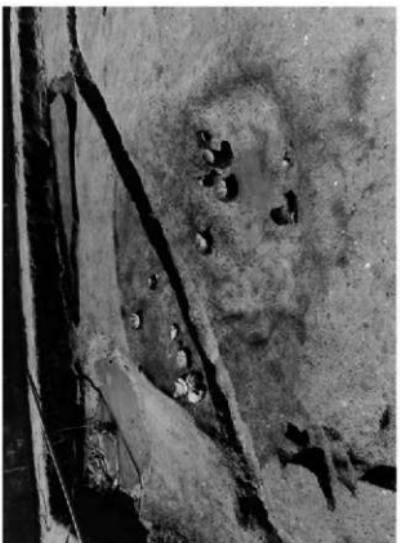
1) SC-07検出状況 (北西から)



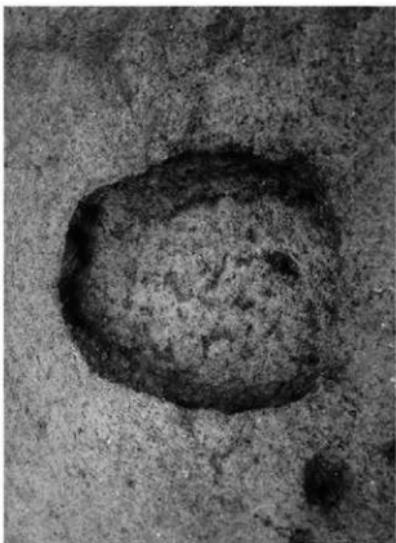
2) SC-08検出状況 (南東から)



3) SB-01検出状況 (北東から)



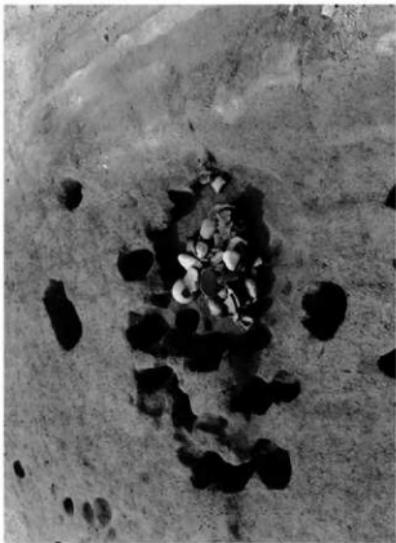
4) SK-04検出状況 (北東から)



1) SK-08検出状況 (南西から)



2) SK-10遺物出土状況 (北西から)



3) SK-11遺物出土状況 (北東から)



4) SP-01遺物出土状況 (南から)



出土遺物（縮尺不同）



— 報告書抄録 —

書名 女原3
ふりがな みょうばる3
副書名 第6次調査の報告
巻次
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号 第1010集
編著者名 加藤隆也
編集機関 福岡市教育委員会
発行機関 福岡市教育委員会
発行年月日 20080331
作成法人ID 40137
郵便番号 810-8621
住所 福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名 女原遺跡
ふりがな みょうばるいせき
遺跡所在地 福岡市西区大字女原49-1他
市町村コード 40137 遺跡番号 0688
北緯 33°34'31"
東経 130°15'53"（世界測地系）
調査期間 20060614～20061101
調査面積 2,580
調査原因 土地区画整理
種別 集落
主な時代 古墳時代中期～後
遺跡概要 竪穴住居8、掘立柱建物1、土塙11、溝1
特記事項 今宿地域内での古墳時代中後期集落の時期的変遷



発掘調査前風景

表紙 写真：調査区遠景（北から）
図版扉写真：調査地と志摩半島を望む
（伊都区画整理事務所提供）
裏表紙写真：発掘作業風景（力武卓治撮影）

みょうばる
女原遺跡3

— 第6次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1010集

2008(平成20)年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 大同印刷株式会社
福岡市中央区今泉1丁目13番30号

MYOUBARU SITE 3

— Results of the 6th excavation of Myoubaru site —

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.1010



2008

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
JAPAN